

05 特集1

政府への要請の実施について

- 持続可能な産業基盤強化のための今後の酪農乳業対策の考え方について
- 学校給食用牛乳の安定的な供給及び利用の推進に係る要請

08 特集2

「ミルクの価値再発見！ー未来へのミルクの物語ー」
～「牛乳の日」記念学術フォーラムを開催～



j-milk report j-milk report j-milk report j-milk report j-milk report

report j-milk report j-milk report

J-MILK REPORT

この度の地震により被災された皆様に
心よりお見舞い申し上げます。
一日も早い復興をお祈りいたします。

j-milk report Vol.21

CONTENTS

- 03 乳の学術連合の窓
小児科医の視点で見る“牛乳の良さ”
～子どもの成長・アレルギーとの関わり～
下条 直樹 氏 千葉大学大学院教授
- 05 **特集 1**
政府への要請の実施について
- 08 **特集 2**
「ミルクの価値再発見！～未来へのミルクの物語～」
～「牛乳の日」記念学術フォーラムを開催～
- 11 牛乳の日・牛乳月間に合わせて
全国各地でイベントを開催
～牛乳乳製品の認知度向上につなげる～
- 13 乳和食の各種イベントを開催
大量調理向けの「スチコン乳和食セミナー」を初開催、
農林水産省内「消費者の部屋」で「乳和食」を紹介
- 14 平成 28 年度の生乳及び牛乳乳製品の
需給見通しと当面の課題について
- 16 今年度の事業方針と重点課題への対応を説明
～Jミルクブロック会議を開催～
- 17 **新連載**
みるくと私
酪農の未来につながるエビデンスを示したい
竹下 広宣 氏 名古屋大学大学院生命農学研究科 准教授
- 18 **新連載**
サポートメンバーインタビュー
「乳」の価値を幅広く伝える活動に期待
原 宰 氏 株式会社明治 市乳営業本部 市乳企画部長
- 18 Jミルクの活動日誌
- 19 今後のスケジュール・グループ紹介・編集後記





乳の学術連合の窓
牛乳乳製品健康科学会議

小児科医の視点で見る“牛乳の良さ”

～子どもの成長・アレルギーとの関わり～

下条 直樹 氏 千葉大学大学院教授

子どもたちの健やかな成長のために、カルシウムを豊富に含む牛乳乳製品が果たす役割は大きい。一方で、乳を含むさまざまな食物アレルギーに悩む子どもも増えている。免疫・アレルギーを研究する下条直樹氏（乳の学術連合・牛乳乳製品健康科学会議幹事）に、小児科医の視点から見た乳の価値や、アレルギー疾患との関係性を聞いた。

“治す・予防する”を第一に

先生の研究内容について簡単にご紹介をお願いします。

下条：私は小児科医として、免疫・アレルギーを専門に研究してきました。文明化や都市化に伴うアレルギー疾患の増加の背景にあるのは、食を含めた環境の変化であると考えられています。それが妊婦や赤ちゃんの体に影響を与えることで、体内でアレルギーに関わる免疫細胞が支配的になるような環境をつくっていると考えられます。そうしたメカニズムを知り、食や環境の改善などによりアレルギーを予防・治療する方法を探ることが私の研究テーマです。

研究の視点はいくつかあります。ヒトの免疫系の機能は生後1歳までに形成され、この段階でアレルギーになる体質が決まるという報告があります。この時期における食物と腸内細菌を含めた免疫環境と、アレルギー疾患発症の関連性を調べ、予防策を探ることが一つのテーマです。また、出産前の母親の食べ物や体質が影響している可能性もあるので、お母さんの体質や母乳の質を変えることで予防につなげるという視点もあります。

私は臨床医ですから、疾患のメカニズムを知ること以上に、目の前の患者さんの病気が治ること、予防できることこそ重要だと考えます。アレルギー疾患を数パターンに分類し、例えば生まれる前からアレルギーに

なりやすい体質なら、胎児の免疫の働きを高める方法をアドバイスする、生後の環境の影響でアレルギーになってしまう場合は、赤ちゃんの段階で良い腸内細菌を定着させるなど、アレルギーを予防するための具体的な戦略を示してあげられたらいいなと思っています。

正しい栄養知識と乳の価値発信を

先生の研究内容と乳との関わりは。

下条：小児科の観点では、栄養というテーマでの関わりがあります。牛乳は子どもたちのカルシウムの供給源として重要ですし、たんぱく質やビタミンなどトータルの栄養バランスという点でも優れた食品です。成長期に上手に飲んでもらうことが大切だと思っています。

もう一つは、牛乳アレルギーという問題です。アレルギー疾患の中でも牛乳アレルギーは“手ごわい”アレルギーと言えます。例えば卵や小麦のアレルギーは、原因となる食物を少しずつ食べて治す治療法（経口免疫療法）によって改善しやすいのですが、牛乳は飲んで治すというやり方では簡単に効果が出ないことが多いからです。その意味でも、牛乳をもっと上手に摂取できるような方法を研究する必要があるでしょう。

また、最近の研究から、アレルギーになることを恐れて本来摂取すべきタイミングで離乳食を開始しないことが、かえって食物アレルギーを増やす可能性が大

INTERVIEW

きいことがわかってきました。

こうした疾患としての牛乳アレルギーだけでなく、たんに飲まない、好き嫌いとしての牛乳嫌いもあります。小児科医としては、親子に牛乳の良さを理解してもらうことで牛乳をうまく摂取していけるようになって欲しいと思います。

牛乳の良さを理解してもらう上では、どんな取り組みが必要でしょうか。

下条：栄養学の基礎的な正しい知識を伝える栄養教育を基盤にしながら、ミルクの本当の価値を発信することがポイントだと思います。アレルギー疾患の予防には、食が大きな役割を果たします。一つの食品を摂るだけで健康になることはありえないので、食生活全体のバランスの中に牛乳を位置づけ、適切に摂ってもらうことが大切です。

そのためにも、自分の体をつくる食物と栄養を科学的に理解することが重要です。栄養教育は子どもたちや親にも必要ですし、医師にも必要。医師の情報発信は患者さんにも、社会的にも影響力がありますが、医学部の授業では栄養に関するものが少なく、医師であっても最新の栄養学の知識が不足しがちなのです。

私は昨年度から、牛乳乳製品健康科学会議の「乳糖不耐」に関する分科会の委員長を務めています。乳糖不耐とは、乳糖分解酵素の活性が低いため、牛乳を飲むとお腹にガスがたまる、お腹がゴロゴロするなどの不快症状が現れることです。消費者調査では、牛乳を飲まない理由のトップに乳糖不耐が挙げられており、この症状を正しく理解してもらうことが課題になっています。科学的な意味では日本人は遺伝的には9割以上の方が乳糖不耐にあたります。しかし一方で、乳糖分解酵素の活性のない人でも、200ml程度までの飲用な

ら目立った症状は出ないという調査結果もあります。

分科会ではこの調査結果を重視し、「ほとんどの人は一定量なら問題なく飲めるようになる」ことを説明できるエビデンスを示したいと思っています。まずは飲めることを知ってもらうこと。このような研究を通じて乳糖不耐への理解と対応を促していければと考えています。

食料生産の現場体験が大切

最後に、酪農乳業や乳の学術連合の活動に対する期待をお聞かせください。

下条：自分たちが生きるために食べているものが、どのようにつくられているのかを教育することは大切だと思います。食料生産の現場を見て体験する機会を、たくさん子どもたちに提供することが重要です。

牛乳の場合は、牧場に出かけて牛やその他の家畜と触れ合うこともできます。これは広い意味での情操教育としても意義がありますし、免疫学的には、緑の自然や動物と接することで免疫系が影響を受けて、アレルギーになりにくくなると報告されています。家畜でなくても、犬を飼っている家庭の子どもはアレルギーになりにくいという研究データがあります。私たちは、外界のさまざまな生き物と菌をやり取りすることで免疫系を強化してきた可能性が大きいと考えられます。酪農体験の中でこうした知識も紹介してあげると、子どもたちの興味をより深められるかもしれませんね。

乳の学術連合では、他の分野の先生方と交流できることが大きいと感じています。自分の専門外の話聞くことがとても勉強になります。異なる専門分野を持つ研究者が交流し、新たな価値を生み出していく活動を継続していただきたいと思っています。



下条 直樹 氏

千葉大学大学院 医学研究院
小児病態学 教授
牛乳乳製品健康科学会議



牛乳乳製品健康科学会議
乳の学術連合

牛乳の良さ・価値の捉え方や発信方法について多くの示唆をいただきました。本日はありがとうございました。

特集1



政府への要請の実施について

Jミルクでは、第1回理事会(5月27日開催)において、『持続可能な産業基盤強化のための今後の酪農乳業対策の考え方について～TPP大筋合意を踏まえた総合的国内対策に関する政策要望～』及び『学校給食用牛乳の安定的な供給及び利用の推進に係る要請』の要請内容を決定した。その後、6月2日に、農林水産省に対し、要請を実施した。

持続可能な産業基盤強化のための今後の酪農乳業対策の考え方について

～TPP大筋合意を踏まえた総合的国内対策に関する政策要望～

平成27年度第5回理事会(2月18日開催)において、平成27年10月のTPP大筋合意について、酪農乳業界としては、将来にわたる持続可能な産業基盤の確立を図る観点から、政府が検討を進めている「総合的なTPP関連対策大綱」において、酪農乳業の課題が適切かつ確実に反映され、必要な施策が盛り込まれるよう、

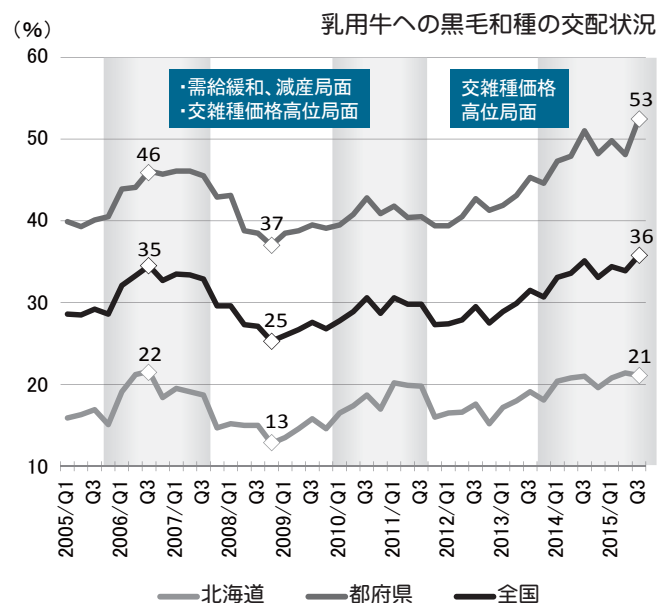
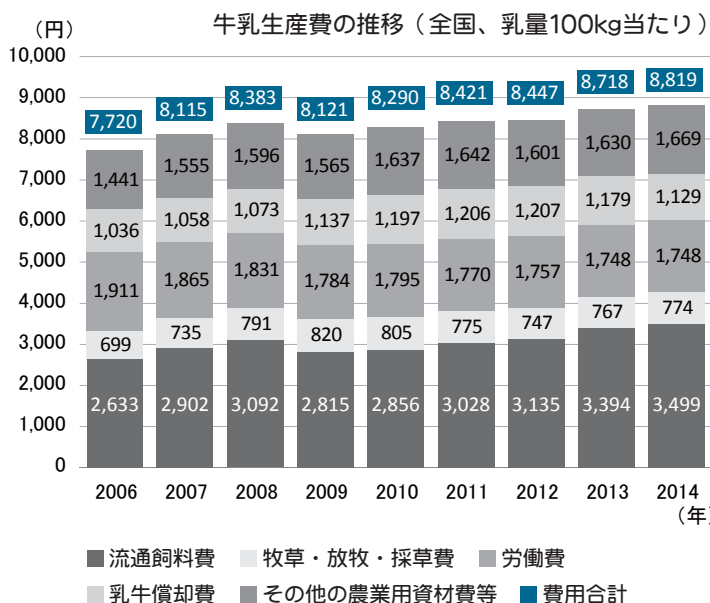
積極的な意見具申を行うことが必要である旨決定されました。

以上を踏まえ、平成28年4月12日と5月20日に課題検討委員会を開催して提言案を取りまとめ、5月27日開催の理事会において政策提言を決定しました。

(以下、政策提言の概要)

1 酪農生産基盤の強化を図るための対策

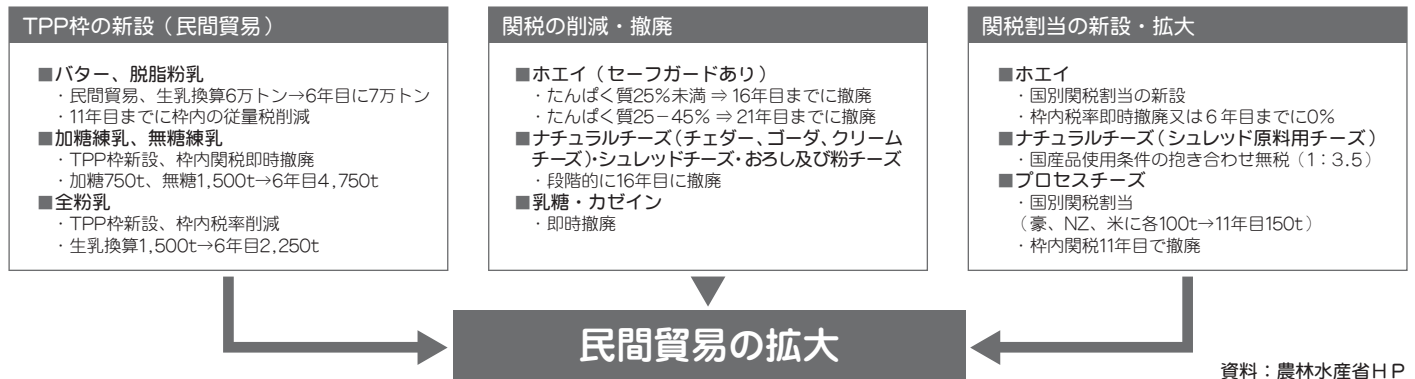
- 飼料価格高止まりによるコスト増高、流通飼料に依存した酪農経営システムの脆弱性の顕在化と酪農家の離農
 - 適切な生産技術の高度化と普及、国産粗飼料・飼料用穀物作付け推進及び新規就農促進
- 肉用子牛生産増による後継牛不足、酪農経営は和牛素牛供給源となる構造が強まる傾向
 - 750万トンの生乳生産目標を実現するために、乳牛の輸入も含めた緊急的な乳用牛確保対策



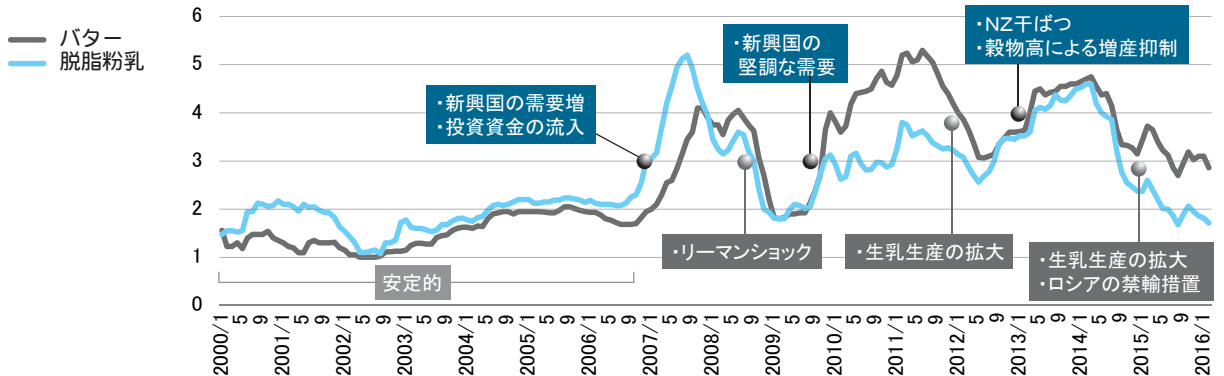
ACTION

2 生乳及び牛乳乳製品の流通の安定を図るための対策

- 乳製品市場のボラタリティ（不確実性・変動性）の高まり、民間貿易の拡大による流通と需給の混乱の恐れ
 - 政府・酪農・乳業の役割を明確にするとともに共同した危機管理の取り組み
 - ボラタリティ（不確実性・変動性）が高まることを前提としたセーフティネット構築
 - 国産牛乳乳製品の価値を高める取り組み（安全安心・教育ファーム等）への支援



乳製品国際価格の推移 (千ドル/トン)



3 酪農経営の所得安定・再生産確保を図るための対策

- 自由化による収益性悪化に伴う離農・生乳生産減の可能性
 - 国産生乳需要の確保と酪農経営の所得安定を踏まえた加工原料乳生産者補給金制度の運営と、そのための財源確保
 - 同制度の持つ地域間協調機能を発揮するための運営と、都府県酪農の所得安定対策の措置の検討・準備

4 指定団体制度の機能を維持し強化するための対策

- 市場のボラタリティ（不確実性・変動性）が高まる中、指定団体制度が果たしてきた需給変動リスクへの対応、効率的流通、安全安心の確保、乳業者との協調といった機能の重要性は増している
 - 指定団体制度の機能が維持・強化される支援が重要

5 乳業者の合理化及び競争力の強化を図るための対策

- 国産牛乳乳製品の需要を確保するために競争力強化が必要
 - 市場規模に対応した適切な生産能力を確保するための工場の再編・整備、乳製品製造施設の効率的な運営を共同で推進することへの支援、商品研究・開発など総合的な競争力強化・高付加価値化への支援が重要
- 長期的には輸出を推進することも重要
 - 長期的な視点に立って支援することが重要

学校給食用牛乳の安定的な供給及び利用の推進に係る要請

平成29年度の学校給食用牛乳供給事業に関する要請については、酪農乳業及び学乳供給現場の諸課題を踏まえ、関係者の意見・要望の取りまとめを行い、国の施策等への反映に努めることとした。

平成28年2、3月に会員団体等関係者に要請への要

望を調査するアンケートを実施し、その結果を踏まえ4月5日に学乳問題特別委員会を開催して要請文案を取りまとめ、5月27日開催の理事会において内容を決定した。

(以下、要請文の概要)

1 学校給食用牛乳供給制度に関する要請事項

(1) 学校給食用牛乳供給制度の堅持について

- 学校給食用牛乳供給制度は、児童・生徒の体位・体力の向上に貢献してきたほか、カルシウムの供給源として、含有量及び吸収率の両面から他の食品では代替が効かない食品である。
- 子どもたちをめぐる生活環境が厳しくなる中、牛乳利用を前提とした栄養バランスに優れた学校給食の役割はこれまでになく重要となっている。
- TPP交渉合意などにより、国産生乳需要基盤強化の面からも、引き続き重要な役割を担っている。
 - 政府は、これらの状況を十分かつ総合的に踏まえ、学校給食用牛乳供給制度が確実に堅持されるよう、関係省庁間で連携して必要な対策を講ずること。

(2) 地方行政による制度運営への適切な関与について

2 学校給食用牛乳等供給推進事業の予算及び運用に関する要請事項

(1) 必要な予算額の確保

(2) 安定的な制度運営と事業の充実

- ① 供給条件不利地域(校)に対する安定需要確保に係る助成について
 - 本事業に係る28年度の事業変更については、地域性への十分な配慮が不十分であるとの指摘。
 - 実態調査を実施し、必要に応じて仕組みの見直し等を検討すること。
- ② 学校給食用牛乳の風味問題等に関する指導及び支援について
 - 近年、学校給食において、衛生事故(異物混入や腐敗など)とは異なった異味異臭問題の発生が散見。この背景には、児童・生徒の味覚が特に鋭敏であることなど、学校給食用牛乳ならではの課題もある。
 - 生乳の生産や乳用牛の飼養、牛乳の製品製造等の流れや衛生及び風味の管理状況などについて学校関係者の十分な理解がなされるようにすることが必要。
 - 風味問題等の発生時においては、健康被害のリスクが伴う衛生事案なのか、それとも風味事案なのかについては、教育委員会や学校など教育サイドの判断により無用な混乱が生じる場合もある。
 - 農林部局、教育部局、衛生部局などの関係部局が連携の上、教育現場等への情報提供を行うこと。
- ③ 未実施校への供給実施に向けた指導・支援について
- ④ 青年期における牛乳飲用促進について
- ⑤ 制度への理解を促進するための取り組みへの支援について
 - 学校給食用牛乳の意義や役割について、正しい理解を醸成するためには、食育などに携わる指導者の育成が不可欠である。また、持続可能な食料生産の取り組みや適切な食文化の形成にかかる理解を深めるためにも、学校給食用牛乳を活用した食育活動は極めて有意義な取り組みである。
 - 業界関係者が実施している牛乳や酪農に係る食育研修会などに、教育関係者が積極的に参加できるよう、政府や地方行政は便宜供与及び必要な支援措置を講ずること。
- ⑥ 学校給食用牛乳の供給に係る生乳需給及び牛乳流通への適切な対応及び支援について
- ⑦ 適正な安全対策・品質管理対策への指導・支援

特集2



「ミルクの価値再発見!—未来へのミルクの物語—」

～「牛乳の日」記念学術フォーラムを開催～

開催日：平成28年6月4日 開催場所：東京大学・伊藤国際学術研究センター

乳の学術連合とJミルクの共催による「牛乳の日」記念学術フォーラムが6月4日、都内で開催された。6月1日の「牛乳の日」と「牛乳月間」に合わせて毎年実施しているもので、今回は「ミルクの価値再発見!—未来へのミルクの物語—」をテーマに、乳の学術連合に参加する研究者らが講演とディスカッションを行った。

ミルクの価値は、生活習慣病や認知症などのリスク軽減といった新たな栄養健康機能面も注目されている。また最近では、「食といのち」の結びつきを考える題材、人類史における食料生産のあり方や近代日本の食文化形成のモデルとして捉えるなど、社会文化的な視点からもミルクの価値が考察されるようになっている。本フォーラムでは、こうした多様なミルクの価値を総括し、再構成すると共に、それらを社会に伝えていくためのストーリーを検討した。

■ テーマ別講演

Program

- 講演 1 「ミルクをめぐる食生活と人々の価値意識」
前田 浩史
- 講演 2 「日本人の健康とミルクの新しい関係」
家森 幸男 氏
- 講演 3 「ミルクの価値とその伝え方」
小長谷 有紀 氏

■ パネルディスカッション

「ミルクの価値を未来につなぐために!」
座 長：大江 靖雄 氏

講演 1

ミルクをめぐる食生活と人々の価値意識

Jミルクが実施した「牛乳乳製品に関する食生活動向調査2015」の結果などをもとに、乳の価値構造を分析した。

牛乳の飲用と強く関連するのは、「牛乳を大切だと思う意識」「美味しいと思う意識」「健康への意識」「酪農への共感意識」の4つで、いずれも意識が高い人ほど牛乳をよく飲んでいる。日本人の約9割が該当する乳糖不耐については、調査でも約5割が症状を自覚するとしている。しかし、自覚のある人の約6割が、週1日～毎日牛乳を飲むと答えている。

これらを踏まえると、日本人にとっての牛乳とは、「栄養健康」「酪農共感」「美味しさ」を主要素とし、ここに乳糖不耐による身体的負荷の強弱が影響を与えることで、価値構造を決定していると考えられる。

「栄養健康」は、牛乳が「栄養素」として導入され、戦後の学校給食などを通じて普及してきた過程で形成されてきたものだ。結果として、日本人は牛乳に対して、「摂るべきもの」といった強い規範性を感じており、他の食品にはない特徴となっている。

「酪農共感」は、現代消費社会における「自然への憧憬」などと結びつくことで、乳の価値を独自のものにしていく。「美味しさ」は、他の要素と相互に関係しながら、乳の持つ「母性の再現性」によって価値を強化していると考えられる。こうした価値構造が、日本人特有のものなのか、アジアや欧米にも当てはまるのかを考察することは、今後の課題である。



前田 浩史

一般社団法人Jミルク 専務理事
乳の学術連合運営委員会 事務局長



家森 幸男 氏

武庫川女子大学
国際健康開発研究所 所長
牛乳乳製品健康科学会議

講演2

日本人の健康とミルクの新しい関係

兵庫県では、「健康ひょうご21県民運動」の一環として、「食事はバランスごはん 大豆と減塩で元気なひょうご」をキャッチフレーズにした食生活改善事業に取り組んでいる。

健康食としての和食の価値は、近年世界的にも注目されている。伝統的な食材の中でも、特に大豆（イソフラボン）と魚（タウリン）は健康面へのメリットが大きく、いずれも摂取量が多い人ほど心筋梗塞の死亡率を下げるのが国際調査でわかっている。一方で、味噌や魚を豊富に摂ることが食塩量の増加につながるという課題もある。また、カルシウムが不足しやすいことも伝統的な和食の短所と言える。

こうした短所を補う食品として、牛乳乳製品を積極的に取り入れていきたい。牛乳乳製品には、肥満や高血圧、糖尿病につながる血糖値の急激な変動を抑える作用がある上、カルシウムが豊富で骨折予防にも効果的だ。

また、牛乳乳製品に含まれるアルブミンは長寿や認知症予防に作用すると考えられており、実際に多く摂っている人ほど認知機能の低下が小さく、認知症発症率も低いことが国内外の研究で明らかになっている。

さらに、最近注目されている乳和食の考え方を取り入れることで、日本人の食生活の課題である塩分過剰摂取とカルシウム不足の課題を一挙に改善できる。

伝統的な和食に牛乳乳製品を加えることにより、和食を世界の健康長寿食へと発展させることが期待できる。

講演3

ミルクの価値とその伝え方

ミルクの価値には、食品としての物質的価値と、「ミルクをきっかけに考えられること」「ミルクを通じて伝えたいこと」など形而上の価値がある。形而上の価値とは、知恵や知識に近い。学術知や科学知などもあるが、中でも注目したいのは経験知である。

人間は哺乳動物として、ミルクで育ってきた経験を持っている。これこそが最も重要な経験知だが、人間はその体験を記憶していない。ミルクの最大の価値は、「失われた経験知」であることこそ、人とミルクの関係の特徴と言えるだろう。

さらにもう一つの「失われた経験知」が、搾乳の起源にある。従来は動物の家畜化から搾乳の発明までに長い時間がかかったと考えられてきた。しかし、最新の研究では、家畜化と搾乳開始はほぼ同時期に起きた可能性がある、という研究結果も出ている。搾乳の発明は、動物を殺さずに食料を得るという点で、人類史における「共生」の始まりだったと価値づけることができる。

哺乳類は、子を育てるために自らの血液から乳という食料を生産する。ミルクは次世代への命のバトンであり、しかもそれは異なる生物種にもつなぐことができる「越境のツール」でもある。こうした学術知もしっかり伝えていく必要がある。

命のバトンということを考える際に注意したいのは、ミルクを「母性という神話」と結びつけないこと。「産むこと」と「育てること」を分けて考え、ミルクは「育つため・育てるための素材」と捉える現代的な視点を持ちたい。



小長谷 有紀 氏

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構 理事
乳の社会文化ネットワーク

パネルディスカッション

ミルクの価値を未来につなぐために！

ヨーグルトやチーズなどの加工品の消費増加は、乳の価値訴求にどんな影響を与えると考えられるか。

前田：消費者調査では、「酪農への共感意識」と生乳の利用頻度には関連性があるものの、ヨーグルトの利用とは関係が見られない。生乳はフレッシュな食品であり、時間的にも感覚的にも「牧場に近い」と受けとめられている。ヨーグルトに対してはそうした感覚がなく、商品としての訴求も機能性中心であるため、価値構造も単純であると考えられる。今後はこうした違いに配慮した価値訴求も必要になってくるだろう。

日本の乳文化の「独自性」をどう考えるべきか。

小長谷：牧畜や搾乳の起源の研究を世界的にリードしているのは、日本人研究者。日本では乳を機能性食品として海外から導入し、食生活に入ってきてからの歴史も短く、特定の地域を除けば牧場も身近にはない。食品としても文化としても「距離のあるもの」だからこそ、余計な意味が付与されていない純粋な研究対象として捉えやすいのだと思う。

コンテンツとチャネルの両面に目を向けて

乳の価値をどのような文脈で伝えることが効果的か。

家森：優れた伝統食を持つ日本人が乳を手にして、食生活に取り入れてきたことに意味がある。ここから生まれる「ミルクプラスの和食」は、生活習慣病を防ぎ、健康寿命を延ばす長寿食として世界に発信できるだろう。



大江 靖雄 氏

千葉大学大学院 教授
乳の社会文化ネットワーク 座長

伝統的な日本食にミルクを取り入れる乳和食のアプローチは有効だが、海外で見られる乳利用の形態を紹介する取り組みも続けるべきだ。例えば南インドのカードライス(ヨーグルトご飯)などは、カレーにもよく合うし、日本人の味覚にも適し、新しい日本食になり得る。

前田：ミルクの価値の中核は、栄養健康価値だと思う。消費者調査では、年齢が上がるほど牛乳乳製品の利用頻度も高くなることも調査でわかっている。健康行動が始まるきっかけに合わせ、ライフステージごとの訴求を充実させる必要があるだろう。

価値訴求においては、コンテンツとコミュニケーションのチャネルの両面を考える必要がある。前述の調査でも、信頼する他者から得た情報は浸透しやすいという結果が出ている。乳の価値を伝えるためには、酪農乳業自体が生活者にとって信頼性の高いチャネルであり続けることが重要だ。

小長谷：ミルクという西洋の食文化を日本で発展させ、その成果を世界へ発信するのは素晴らしいことだと思う。しかし栄養健康の価値は、ミルクの価値の全てではない。私は、その半分に過ぎないと考えている。動物と共生し、食料を生産し、子を産み育て、次代へ命をつないでいく。そうした人とミルクの関係全体を貫くストーリーを通じて、形而上の価値も発信していくことが大切だと思う。

大江：私たちにとって乳が外来文化であることが、むしろアドバンテージになり得るというメッセージは、未来に向けて非常に重要な示唆である。日本での乳の受容と定着化の過程は、他のアジア諸国にも参考になる。ミルクの価値をどのように整理し、どんな文脈で日本人に訴求するのか、また国際的に発信していくのか。本フォーラムで得た知見を踏まえて、皆さんにもぜひ考えていただきたい。

牛乳の日・牛乳月間に合わせて 全国各地でイベントを開催

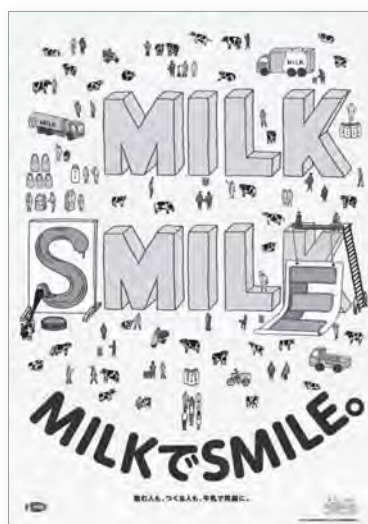
～牛乳乳製品の認知度向上につなげる～

ミルクへの関心を高め、酪農・乳業の仕事をよくの方に認知してもらうことを目的とした「牛乳の日(6月1日)・牛乳月間(6月)」に伴うイベント、セミナー等が全国各地で行われている。Jミルクでは、統一ポスターやパネル、リーフレットなど啓発資料の有償提供を行い、また関連団体と連携を図りながら広報活動を行った。ここでは各地で開催された一部イベントの様相を紹介する。

全国各地の活動件数

- 全国の乳業工場見学 58件
- 全国の関係団体によるイベント 76件
- 「父の日に乳(ちち)を贈ろう！
キャンペーン」 55件
- 合計 189件

■ ポスター・パネル(ポスターは164事業者、1万5千枚配布)



牛乳月間統一ポスター



A1パネル：おいしく減塩乳和食

■ リーフレット(のべ121事業者、20万枚配布)



乳和食でおいしく減塩



乳和食でつよい身体をつくる



コクを楽しむ乳和食



お酢でさっぱり乳和食

EVENT

おいしいミルクセミナー ～乳和食でヘルスケア～

新潟県

実施日時 6月1日(水)
 実施場所 ANAクラウンプラザ新潟
 実施内容 乳和食セミナー、乳和食の試食及び日本乳業協会からのミニ講演、約300名が参加！
 主催 一般社団法人日本乳業協会
 共催 一般社団法人Jミルク、
 一般社団法人中央酪農会議



実施日時 6月1日(水)、4日(土)
 実施場所 名古屋駅周辺、伊勢市外宮バス停前広場
 実施内容 「切欠き」や「熱中症予防」等のチラシ配布
 主催 愛知県酪農協、愛知県牛乳普及協会、
 三重県酪連

キャンペーン・街頭活動

愛知県
三重県

日本の酪農を楽しも～！ 六本木牧場

東京都

実施日時 6月5日(日)
 実施場所 六本木ヒルズアリーナ
 実施内容 ステージイベント、酪農体験ワークショップ、
 ミルクレシピワゴン、クイズラリーなど
 主催 一般社団法人中央酪農会議



乳和食の各種イベントを開催

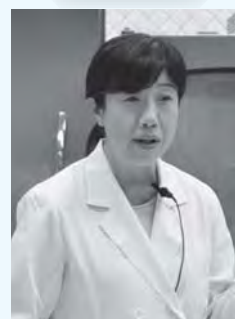
和食の弱点とされる食塩過多やカルシウム不足を補うため、小山浩子氏が考案した「乳和食」。すでに認知度は約25%に上り、各種メディアの注目度も高い。6月21日にNHK「きょうの料理」で紹介されたほか、雑誌「レタスクラブ7月号」や「pumpkin6月号」などでも取り上げられた。Jミルクでは乳和食の一層の浸透を図るため、6月に以下のイベントを実施した。

大量調理向けの「スチコン乳和食セミナー」を初開催

実施日時 6月7日(火)
 実施場所 東京ガス業務用厨房ショールーム「厨BO! SHIODOME」(東京都)
 実施内容 講演：乳和食のコンセプトとは
 小山 浩子氏 (料理家・管理栄養士)
 ：乳和食の病院給食への展開とその可能性
 西村 一弘氏 (駒沢女子大学 教授、緑風荘病院 運営顧問)
 実演：乳和食大量調理デモンストレーション
 藤原 恵子氏 (緑風荘病院 栄養室・健康推進部 主任)
 試食：乳和食おすすめ4品 (大量調理レシピ集から)
 主催 一般社団法人Jミルク

スチームコンベクションオーブンを活用した「乳和食」の大量調理レシピを病院や福祉施設の給食に活用してもらうことを目的に、初めて「スチコン乳和食セミナー」を開催した。

本セミナーでは、乳和食をいち早く病院食に取り入れた緑風荘病院の協力で制作した「大量調理レシピ集(<http://www.j-milk.jp/nyuwashoku/msu7gl00000007f3.html>)」をもとに、スチコンでの調理デモンストレーションと試食を実施。料理家・管理栄養士の小山浩子氏と、駒沢女子大学の西村一弘氏による講演と合わせて、スチコンを使った乳和食の大量調理におけるポイントを紹介した。



農林水産省内「消費者の部屋」で「乳和食」を紹介

実施日時 6月8日(水)
 実施場所 農林水産省消費者の部屋(東京都)
 実施内容 乳和食の調理デモンストレーション (3品)
 主催 農林水産省 (協力・Jミルク)

農林水産省「消費者の部屋」において、小山浩子氏による乳和食の調理デモンストレーションなどを実施した。

デモンストレーションで作られた「かぼちゃのそぼろ煮」や「ミルク納豆」などを試食した農水省の今城生産局長と大野畜産部長は、「とてもおいしい。言われなければ牛乳が入っているとは思わない」と感想を語った。また、来室した一般消費者に味噌の量を1/2にした「ミルク味噌汁」を試食してもらったところ、約84%の人が「減塩するなら普通の味噌汁よりミルク味噌汁を選ぶ」と回答した。

平成28年度の生乳及び牛乳乳製品の 需給見通しと当面の課題について

公表日：平成28年5月31日

生乳生産量の見通し

28年度の生乳生産量は、北海道では、生産の主力となる2～4歳の乳牛頭数が前年を超えることから、前年度を上回る(3,927千トン・前年比100.8%)ものの、都府県では前年度を下回る(3,405千トン・同97.0%)見通しであり、その結果、全国の生乳生産量は前年度をやや下回る(7,332千トン・同99.0%)見通しである。

用途別処理量の見通し

28年度の用途別処理量は、「牛乳等向処理量」は前年度をやや下回る(3,920千トン・前年比99.2%)見通し。「乳製品向処理量」は、下期にかけて減少幅が広がり、年度計では前年度を下回る(3,357千トン・同98.8%)見通しである。

28年度	生乳生産量(見通し)						用途別処理量(見通し) (千トン,%)					
	全国		北海道		都府県		生乳供給量		牛乳等向		乳製品向	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,906	100.4	1,004	102.2	902	98.4	1,892	100.4	1,009	99.0	883	102.0
第2四半期	1,814	99.1	991	101.5	823	96.4	1,800	99.1	1,003	100.4	797	97.5
第3四半期	1,786	98.6	962	100.3	824	96.7	1,773	98.6	976	99.2	797	97.8
第4四半期	1,826	97.8	971	99.1	855	96.4	1,813	97.8	932	97.9	880	97.7
上期	3,720	99.8	1,995	101.9	1,725	97.4	3,692	99.8	2,012	99.7	1,680	99.8
下期	3,612	98.2	1,932	99.7	1,680	96.6	3,585	98.2	1,908	98.6	1,677	97.8
年度計	7,332	99.0	3,927	100.8	3,405	97.0	7,277	99.0	3,920	99.2	3,357	98.8

牛乳等生産量(見通し)

28年度	牛乳類										はっ酵乳	
	牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料					
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
第1四半期	1,196	97.5	765	99.1	25	101.3	88	99.0	318	93.3	289	105.1
第2四半期	1,232	99.7	757	100.2	26	104.4	96	101.4	354	97.7	281	104.9
第3四半期	1,171	98.9	754	99.0	25	92.6	85	101.0	306	98.6	263	100.5
第4四半期	1,090	98.1	707	97.5	23	86.5	82	100.8	278	99.8	271	98.2
上期	2,428	98.6	1,522	99.7	50	102.8	184	100.3	672	95.6	570	105.0
下期	2,261	98.5	1,461	98.3	48	89.7	167	100.9	584	99.2	535	99.4
年度計	4,689	98.5	2,983	99.0	99	95.9	351	100.6	1,256	97.2	1,105	102.2

牛乳等生産量の見通し

28年度の牛乳等生産量は、「牛乳類」は前年度を下回る(4,689千kl・前年比98.5%)見通し。

「はっ酵乳」は、引き続き堅調な需要が見込まれ、前年度を上回る(1,105千kl・同102.2%)の見通しである。

特定乳製品(脱脂粉乳・バター)需給の見通し

28年度の脱脂粉乳の生産量は前年度を下回り125.6千トン、前年比96.5%と見込まれる。7月までに27年度追加輸入残量並びに28年度カレントアクセス輸入として6.9千トンが売り渡される予定となっているが、28年度末在庫量は45.5千トン(前年度末比▲6.0千トン)と減少する見込みである。

バターについても、生産量は前年度を下回り64.0千トン、同96.6%と見込まれる。9月までに28年度カレントアクセス輸入として7.0千トンが売り渡される予定となっているが、28年度末在庫量は17.6千トン（前年度末比▲4.5千トン）と減少する見込みである。

※なお、Jミルクの公表時点では、国において追加輸入の報道発表がなされていないため、追加輸入数量を加味しない公表を行った。

需給動向を踏まえた当面の課題と対応について

生乳生産基盤の確保への取り組み

28年度の生乳生産量は、北海道では生産の中心となる2～4歳の乳用牛頭数が前年を超えるものの、都府県では引き続き減少基調であるため、生乳生産量は僅かに前年を割り込む見込みである。

生乳生産回復に向けて、供用年数延長や事故率低減など乳用牛の能力を最大限発揮する飼養管理の徹底等とともに、黒毛和種交配率が依然として高い水準であることや、初妊牛価格等の高騰が続く現状を踏まえ、国及び酪農乳業関係者は一体となって、後継牛資源を確実に確保するための取り組みの一層の強化が肝要である。

夏季の的確な需給調整対応

今夏(6～8月)の天候は、気温が平年よりも高い確率が50%との予報もあるが、生産現場においては、引き続き、暑熱事故等の防止策を講じて、生乳生産の減少を最小限に留める工夫が求められるところである。

一方、飲用需要期を迎えるにあたり、今後の気象に注視し、夏季の天候要因による需給変動に備えるため需給情報の共有を図るとともに、需要への弾力的な需給調整により安定供給に努めていくことが必要である。

乳製品安定供給への取り組み

特定乳製品(脱脂粉乳・バター)について、28年度の実績は前年度を下回るものの、今後、脱脂粉乳6.9千トン、バター7.0千トンの輸入乳製品が売渡されることにより、当面の乳製品需給は、安定して推移するものと見込まれる。

一方、本予測時点において、28年度末在庫量は前年度末から減少の見込みであることから、国及び酪農乳業関係者は、引き続き生乳生産の維持・拡大に努めるとともに、今後の生乳需給を踏まえながら、輸入等の需給対応により十分な供給量を確保し、乳製品需給の安定を図ることが必要である。特に、バターについては安定供給を図るため、流通小売業界、ユーザーや消費者に対して、適時的確な需給情報を提供し、市場からの信頼確保に努めることが重要である。

5月31日に農林水産省が「バター及び脱脂粉乳等の追加輸入について」を公表

Jミルクの需給見通しに脱脂粉乳2.0千トン、バター6.0千トンの追加輸入を加味すると、以下の通りとなる。

脱脂粉乳の需給(見通し) (千トン,%)

28年度	生産量		輸入 売渡し	出回り量		期末在庫量		
	前年比			前年比	月数	前年比		
第1四半期	34.3	103.6	4.9	34.7	100.9	56.1	5.0	111.1
第2四半期	26.8	93.6	2.0	37.2	105.5	47.7	4.2	98.0
第3四半期	29.0	92.4	—	33.6	105.9	43.1	3.8	88.7
第4四半期	35.4	95.8	2.0	33.0	96.7	47.5	4.2	92.2
上期	61.1	99.0	6.9	71.9	103.3	47.7	4.2	98.0
下期	64.5	94.2	2.0	66.7	101.1	47.5	4.2	92.2
年度計	125.6	96.5	8.9	138.5	102.2	47.5	4.2	92.2

※5月31日に農林水産省が発表した追加輸入2.0千トンは第4四半期と仮定して記載。

バターの需給(見通し) (千トン,%)

28年度	生産量		輸入 売渡し	出回り量		期末在庫量		
	前年比			前年比	月数	前年比		
第1四半期	17.8	103.6	3.4	17.1	101.2	26.1	4.2	136.4
第2四半期	13.8	93.8	3.6	17.7	104.4	25.8	4.1	124.2
第3四半期	13.7	92.4	6.0	22.8	93.0	22.7	3.6	120.3
第4四半期	18.8	95.7	—	17.9	108.9	23.6	3.8	107.0
上期	31.6	99.1	7.0	34.8	102.8	25.8	4.1	124.2
下期	32.4	94.3	6.0	40.7	99.4	23.6	3.8	107.0
年度計	64.0	96.6	13.0	75.5	100.9	23.6	3.8	107.0

※5月31日に農林水産省が発表した追加輸入6.0千トンは第3四半期と仮定して記載。

今年度の事業方針と重点課題への対応を説明

～Jミルクブロック会議を開催～

開催日：平成28年4月7日 開催場所：ベルサール東京日本橋

平成28年度ブロック会議を全国7か所(札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、岡山、福岡)で開催した。東京会場であいさつした宮原道夫会長は、生乳生産基盤の強化を喫緊の課題に掲げ、「27年度の生乳生産量は前年を上回る水準だが、乳牛資源不足は解消しておらず、増産の定着は難しい。乳牛資源の緊急確保対策や供用期間延長のための取り組みを組織の壁を超えて連携して推進すべきだ」と呼びかけた。

課題の整理、明確化、解決に向けて

ブロック会議では、平成28年度の事業方針の説明の他、「牛乳乳製品食生活動向調査2015」から得た知見や、「Jミルクの事業活用」について報告、紹介を行った。

Jミルクでは、3か年計画(平成27～29年度)の2年目に当たる28年度の重点項目として、①ミルクサプライチェーンの安定、②牛乳乳製品の価値向上と酪農乳業への共感性の確保、③事業運営における相乗効果と効率化の追求を掲げている。

ミルクサプライチェーンの安定に向けては、TPP等の国際情勢を踏まえ、3か年程度の長期的な需給情報見通しの策定作業に着手する。さらに今後、政府の「酪農乳業(TPP)対策」に盛り込むべき施策を献策し、酪農乳業が自ら取り組むべき課題の明確化を図る。

牛乳乳製品の価値向上と酪農乳業への共感性の確保に向けては、「知見集積・情報開発」として東京五輪開催によるスポーツ意識高揚に対応した「スポーツアスリートと牛乳乳製品摂取の関係性」を健康科学分野で研究。

乳の学術連合では、「健康科学」、「社会文化」、「食育」の領域横断的な研究として「新たな食育プログラムの開発」等を進めることなどを説明。

さらに、酪農乳業関係者と関連の強い牛乳の日・牛乳月間の取り組みや海外の情報収集を強化するアンチミルク対策、乳和食や牛乳乳製品データベースの新しいコンテンツなどを紹介し、課題解決や価値向上への活用をお願いした。

生活者と牛乳乳製品の関わり

「牛乳乳製品食生活動向調査2015」から牛乳飲用に影響を与えている要因をみると、「乳糖不耐症の症状」では、約45%の人が症状を実感しているが、よく症状が出るという人でも約27%が週3回以上牛乳を飲んでいと回答。

また、酪農家への共感が強い人ほど牛乳類の飲用頻度が高いことや、牛乳類の利用方法の多様化(混ぜて飲む、かけて食べる等)が進んでいる実態も明らかになった。

<http://www.j-milk.jp/tool/chousa/doukou/hn0mvm0000000trs.html>

Jミルク事業に対する多くの提案も

アンケート調査からは、「国際情勢も踏まえたタイムリーな情報提供」や「中長期の需給見通し、精度の向上」、「Webサイトの充実と認知度向上」、「牛乳の価値をわかりやすく消費者に伝える」、「教育現場で価値訴求ができるように働きかける」、「生産者の声を伝える」など、Jミルクへの期待や要望など多くの意見、提案が寄せられた。





酪農の未来につながるエビデンスを示したい

竹下 広宣 氏（名古屋大学大学院生命農学研究科 准教授）

さまざまな立場で酪農乳業に関わる方々に、ミルクとの出会いや思いを語っていただくコーナー。第1回は、名古屋大学大学院の竹下広宣准教授(乳の学術連合・乳の社会文化ネットワーク会員)に、研究対象としてのミルクの魅力をお聞きした。



学術研究がミルクとの出会いに

私の専門研究分野は、計量モデルを用いた農業経済学や食品経済学、食品の安全に関する経済分析です。近年は、消費者の意思決定行動に法則性・規則性を見出そうとする行動経済学の考え方を取り入れてきました。

そうした研究活動の一環として、ある先生の紹介で乳の学術連合の学術研究に応募し、採択を受けました。東日本大震災の被災地産の乳の需要回復につながる、効果的なコミュニケーションのあり方を探る研究です。ミルクに関する研究は私にとって初めてで、これがJミルクと関わるきっかけともなりました。乳の学術連合がなかったらJミルクと関わっていなかったかもしれません。

より多くの研究者がミルクと関わり、さまざまな視点で研究を行うことが、酪農乳業の可能性を広げていきます。その意味でも乳の学術連合による研究支援活動は重要ですから、継続的な取り組みを期待したいです。

データが豊富でわくわくする題材

研究対象としてのミルクの特徴は、日本の統計



竹下 広宣 氏

名古屋大学大学院
生命農学研究科 准教授
乳の社会文化ネットワーク会員



データが豊富なこと。比較や分析がされていない手つかずのデータも多く、研究者から見るとわくわくするような題材です。

例えば、国内の酪農家戸数は減少していますが、他の産業と比較すると減少幅は低い。その背景にある、酪農に従事している人をひきつけている要因を明らかにできれば、中長期的な酪農支援策を考える上での有用なエビデンスになるでしょう。

また、私は今年から IFCN (International Farm Comparison Network) と連携した国際比較研究にも携わっています。現代の消費者が重視するのは、食品の機能性よりも価値観の共有です。安全性や自然環境への負荷、動物愛護など、海外で重視される価値観をクリアした上で、日本産の高品質を備えた乳製品であれば、海外でも売れる余地が大いにありそうです。国際比較研究を通じて日本の酪農の現状を分析するだけでなく、世界市場につながる可能性も示していければと思っています。

膨大な統計データをデータのままで終わらせず、研究分析を加えることで酪農の将来像や夢を支えるエビデンスへと変えていく。そんな視点で、これからミルクと関わっていきたいですね。

新連載 サポートメンバーインタビュー

「乳」の価値を幅広く伝える活動に期待



マーケティング委員会委員長

原 幸 氏

株式会社明治
市乳営業本部 市乳企画部長

Jミルクと一緒に活動していただいている関係者の皆さんに、今後の期待や提言を語っていただくコーナー。

Jミルクとの関わりは？

社内ではマーケティングの担当者として、「明治おいしい牛乳」などの商品を手がけてきました。消費拡大の事業などで業界団体と連携する機会も多く、Jミルクさんとも15年くらいお仕事をさせていただいています。現在は、Jミルクのマーケティング委員会の委員長も務めています。

Jミルクの活動をどう評価されていますか？

広告宣伝が中心だった以前に比べて、近年はマーケティング寄りの取り組みが増えてきましたね。消費者の心理や動向を調査・分析をした上で手を打つ、戦略的な活動を評価しています。乳の学術連合のように、酪農や牛乳に携わってくれる研究者や専門家を組織化する新しい取り組みにも注目しています。学術連合から発信される情報も増えていて、成果が出始めていると思います。

今後の取り組みへのご意見、提言は？

中小の乳業メーカーさんや牛乳販売店さんの活動を支援するという視点で、マーケティングに使えるツールの開発や提供をやっていかれるといいと思います。一方で、学校向けの食育活動などは大手メーカーや団体が個別に行っていて、重複している部分もあります。Jミルクさんを中心にまとまることで、効率よく効果的な活動ができるのではないのでしょうか。

中長期的には、幅広く取り組むだけでなく、活動にメリハリをつけていくことも必要だと思います。既存の活動を評価し、さまざまな意見を取り入れながら、適切な方向性を見出してほしいです。

今後も価値訴求の中心は牛乳だと思いますが、国産生乳を使ったヨーグルトやチーズなどの成長分野を取り込むことで、全体としての需要拡大を図るという視点も大切です。牛乳だけでなく、広い意味での「乳」の価値を伝える取り組みに期待したいですね。

Jミルクの活動日誌

平成 28 年 3 月から平成 28 年 5 月に実施した主な会議やセミナーなどです。

3 March

- ① 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(仙台)
- ③ 第2回臨時総会
- ④ 第42回メディアミルクセミナー
- ⑩ 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(大阪)
- ⑩ 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(岡山)
- ⑪ 生乳及び牛乳乳製品需給見通し等説明会(福岡)
- ⑪ 和食と乳の研究会・研究報告会
- ⑮ ポジティブリスト委員会
- ⑳ 牛乳食育研究会・幹事会
- ㉒ 乳の社会文化ネットワーク・幹事会
- ㉔ 生乳検査担当者研修会
- ㉞ 生乳検査精度管理認証特別委員会

4 April

- ⑤ 第1回学乳問題特別委員会
- ⑥ 第1回マーケティング委員会
- ⑦ ブロック会議(東京)
- ⑫ 第1回課題検討委員会
- ⑫ ブロック会議(大阪)
- ⑬ ブロック会議(岡山)
- ⑭ ブロック会議(福岡)
- ⑱ 第1回牛乳乳製品健康科学会議幹事会
- ⑲ ブロック会議(名古屋)
- ㉒ ブロック会議(仙台)
- ㉒ ブロック会議(札幌)
- ㉒ 酪農乳業危機管理対策連絡会
- ㉒ 乳の学術連合運営委員会

5 May

- ⑱ 第1回需給委員会
- ㉒ 第2回課題検討委員会
- ㉔ 第1回理事会
- ㉔ 世界高血圧の日・市民公開講座(盛岡)



今後のスケジュール 平成28年7月1日からの会議・行事の開催予定を掲載いたします。

日程	イベント	会場	内容
7.13	第2回需給委員会	Jミルク会議室	需給見通しの検討
7.23	栄養指導実践セミナー	山梨県	「高齢者のフレイルとその予防に向けた栄養」(講師：小川純人氏) 「栄養相談の実践～継続できる食生活改善」(講師：齋藤長徳氏)
7.27	メディアミルクセミナー	千代田区	「妊婦の低栄養と次世代の生活習慣病リスク」
7.29	乳和食指導者育成講習会	岡山市	小山先生による調理実習(7品)で乳和食の調理技術を習得
8.2	酪農乳業みらいセミナー大阪会場	大阪市	「日本農業の持続可能性と酪農乳業の役割」 「ヒトにとって牛乳はどのような食品なのか？」
8.4	酪農乳業みらいセミナー東京会場	中央区	「人類にとってのミルク利用の意義」 「日本人の栄養問題」
8.19	酪農乳業みらいセミナー札幌会場	札幌市	「日本農業の持続可能性と酪農乳業の役割」 「ヒトにとって牛乳はどのような食品なのか？」
8.26	牛乳食育研究会 幹事会	Jミルク会議室	平成29年度「食と教育」学術研究公募テーマについての検討
8.26	平成28年度「食と教育」学術研究報告会 合同情報交換会	学士会館	「食と教育」学術研究者による研究報告、「乳の学術連合」情報交換会
8.27	平成28年度「牛乳乳製品健康科学」 「乳の社会文化」学術研究報告会	学士会館	「牛乳乳製品健康科学会議」「乳の社会文化」学術研究者による研究報告
9.2	第2回マーケティング委員会	Jミルク会議室	マーケティング活動上期報告と下期及び平成29年度活動について
9.14	第3回需給委員会	Jミルク会議室	需給見通しの検討
9.16	第1回マーケティング専門部会	未定	平成28年度上期マーケティング活動報告と下期事業計画について
9.16	乳和食指導者育成講習会	浅草	小山先生による調理実習(7品)で乳和食の調理技術を習得
9.28	第2回理事会	Jミルク会議室	平成28年度事業の進捗と下期の主な事業
10.14	酪農乳業みらいセミナー福岡会場	福岡市	「人類にとってのミルク利用の意義」 「日本人の栄養問題」

グループ紹介コーナー

「Jミルクで働くスタッフを紹介します。」
今回はマーケティンググループです。



マーケティンググループ
(左から西本、細谷、林、川村、前、佐野、ラフォリ)

マーケティンググループの活動紹介

「Jミルクって牛乳を売っているの？」と、生活者の方からお問い合わせいただくことがあります。その時に私たちは、「生憎、ミルクはお売りしておりませんが・・・暮らしに役立つミルクの価値情報を無料でご提供させていただいております」とお答えしています。

マーケティンググループでは、ミルクの多様な価値を解明するため、医学・栄養学・農業経済学・文化人類学・教育学など、200人の研究者が所属する「乳の学術連合」の先生方にご協力いただいております。今後、グループ一同「分かりやすく、伝わりやすい」情報コンテンツづくりを心がけながら、酪農乳業関係者や学校教職員など専門家の皆さまが活用できるコンテンツを提供して参ります。



編集後記

■ 2014年来のエルニーニョが終息、しかしこの夏一転して正反対のラニーニャ現象の発生が取りざたされています。大きな気候変動をもたらすとされており、昨年の比較的涼しい夏とは裏腹に、今年の夏は猛暑が予測され、酪農家生産現場にとってはあまり有り難くない話です。過去には世界の穀倉地帯が大干ばつに見舞われ、穀物の高騰にもつながっているのに注視していかねばなりません。

■ TPP大筋合意を受けての国内対策や学校給食用牛乳の安定的供給などに係る政策要望について、Jミルクでは今年の初めから理事会等で数度にわたって協議し、政策提言を決定の上6月初頭、農水省に要請しました。今回その概要について特集を組んだほか、牛乳の日記念学術フォーラム、乳和食の普及に向けての各種イベント報告、特に病院給食等での導入拡大を目指した「大量調理レシピ」に係るセミナーの開催、生乳・乳製品の需給見通し、ブロック会議報告など、今回も大変盛り沢山の内容でお届けします。(K・H)

牛乳ヒーロー&ヒロインコンクールの開催

Jミルクでは昨年度に引き続き、『キミの思い描く「牛乳ヒーロー」、「牛乳ヒロイン」』をテーマに、牛乳ヒーロー&ヒロインコンクールを開催しています。

多くの小学生が参加することで、学校給食での牛乳の位置づけがより明らかになることから、酪農乳業関係者の皆様に応募促進のご協力をお願いいたします。また、牛乳の特徴を伝える「食育教材」も制作しましたので、併せてご活用ください。詳しくは担当者にお問い合わせください。



※<http://www.j-milk.jp/hero&heroine/index.html>

Jミルク マーケティングG 担当:林 雅典
TEL:03-6226-6351 Mail:m-hayashi@j-milk.jp

乳の学術連合『学術研究合同報告会』の開催

「乳の学術連合」学術研究の報告会を、新たな知見の発信の場としてだけでなく、乳の学術連合としての領域横断的研究の推進及び研究者間の交流の場として位置づけ、8月26日(金)・27日(土)の2日間、「健康科学」「社会文化」「食と教育」の3研究グループが合同で開催する予定です。

開催日時

8.26(金) 13:30 ~ 16:45

「食と教育」学術研究報告会

17:00 ~ 18:30

「乳の学術連合」情報交換会

8.27(土) 10:00 ~ 16:00

「牛乳乳製品健康科学」学術研究報告会

10:00 ~ 16:00

「乳の社会文化」学術研究報告会

会場

学士会館(東京都千代田区)

平成28年度酪農乳業みらいセミナー開催のご案内

Jミルクでは昨年度に引き続き、『酪農乳業関係者と日本の酪農生産や牛乳乳製品の「みらい」について考える』をテーマに、全国4か所でセミナーを開催いたします。趣旨をご理解頂き、ぜひご参加ください。

大阪・札幌会場

Program

開催日時・場所

大阪会場:2016.8.2(火) AP大阪梅田茶屋町
札幌会場:2016.8.19(金) アスティ45 ACU
ともに13:30 ~ 16:45

講演内容

1 日本農業の持続可能性と酪農乳業の役割
名古屋大学大学院 教授 生源寺眞一 先生

2 ヒトにとって牛乳はどのような食品なのか?
~食品科学からみた牛乳の特別な意義~
東北大学大学院 教授 齋藤忠夫 先生

東京・福岡会場

Program

開催日時・場所

東京会場:2016.8.4(木) ベルサール東京日本橋
福岡会場:2016.10.14(金) JR博多シティ会議室
ともに13:30 ~ 16:45

講演内容

1 人類にとってのミルク利用の意義
~その起源と発達~
帯広畜産大学 准教授 平田昌弘 先生

2 日本人の栄養問題
~その歴史の変遷と牛乳乳製品が果たしてきた役割~
神奈川県立健康福祉大学 学長 中村丁次 先生

■ セミナー参加費 無料(交通費は各自ご負担をお願いします。)

■ ウェブサイトからお申し込みいただけます。 お問い合わせ:広報G 担当:関 芳和 Mail:y-seki@j-milk.jp

■ 申込締め切り:大阪・東京会場 7.28(木) 札幌会場 8.12(金) 福岡会場 10.7(金)

j-milkレポート vol.21 発行日/2016年6月 編集・発行/  一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>  <https://www.facebook.com/jmilkjp>